

モリエールのことば 14

2019.5月号 柴田耕太郎

スカパン：

ならば私も、死ぬまでの間、お席に連ねさせていただくとしますか。

『スカパンの悪だくみ』第3幕第13場

主人をコケにしたのがバレたスカパンは一計を案じ、落ちてきた金槌に頭を砕かれたフリをし、担架に運ばれてくる。死に際に自分の非道を懺悔するスカパンを、主人のジェロントは渋々許してやる。ほっとして感謝を述べるスカパンに、ジェロントが但し書きをつける。

ジェロント：

ああ、だが許すのは、お前が死んでしまうというからだ。

スカパン：

というと、旦那。

ジェロント：

死ななきゃ、この限りでない。

スカパン：

痛、あ痛。体の痛みがまた増してきた。

アルガント：

ジェロントさん、我らが喜びに免じて、条件なしで許してやってくださらんか。

ジェロント：

うん、まあいいでしょう。

アルガント：

ではご一緒に夕食に参りましょう、この喜びを一層味わうために。

このあと上記の台詞で、幕切れとなる。

伝統的な演出では、スカパンは包帯をとって担架から起き上がり、この台詞をいう。

転んでもただでは起きない「悪だくみ」の英雄、スカパンの面目躍如といったところだ。

あらかじめ台本を読んでも、この結末には唸らせられる。私が昔、コメディイ・フランセーズで観たのは、名優ロベール・イルシュのスカパンだったか。包帯をとり、起き上がり、トンと地上に降りる、その軽快な動作と発声 *en attendant*(アンナタンダン「その間」)が印象に残っている。

「条件なしで」(*sans condition*)はアルガントでなく、スカパンの機転で救われた娘たちのセリフになっていた。演出の裁量範囲だが、サンコンディシオンと、di と o の伸ばした

音に、親たちを丸め込もうとする娘たちの願いが感じられた。

とどめの台詞は、直訳するところなる：

Et moi, qu'on me porte au bout de la table, en attendant que je meure.

では私は、自分が死んでしまうのを待つ間に、食事の末席に運んでもらえますれば(ありがたい)。

拙訳は翻訳の裁量範囲で、幕切れらしく訳したつもりだが、如何だろう。